

土器から見た南武蔵の古墳時代中期群集墓

小 野 本 敦

はじめに

多摩川流域を中心とする南武蔵地域の古墳時代研究は、特に古墳時代中期に関しては関東の他地域と比べ停滞気味である。その最も大きな要因は大型前方後円墳の造営が顕著でない点にある。かつて甘粕健は、古墳時代中期以降に南武蔵から大型古墳が姿を消す現象を『日本書紀』安閑天皇条に記載された武蔵国造の乱と結び付けて解釈した（和島・甘粕1958、甘粕1970）。南武蔵の古墳時代中期社会に対するイメージは、この甘粕説によって決定付けられたと言ってよい。そして、その後の編年研究の進展によって甘粕説がそのままの形では成立し得ないことが明らかになった。今なお当該地域の研究に大きな影響を落としている。

本稿では、近年検出例が増えつつある多摩川中流域の群集墓の検討を通して、従来閑却されがちであった南武蔵における古墳時代中期の素描を試みる⁽¹⁾。

1. 群集墓をめぐる研究史と本稿の視点

多摩川中流域の群集墓は、狛江古墳群のように古くから周知されていた例もあるが、ほとんどは1980年代以降にその存在が確認され始めた。それらは周溝の一部を陸橋状に掘り残すという形態的な類似性が早くから注目されていた。長瀬衛は、これらが陸橋の方位に共通性を持ち、陸橋周辺から土器を多く出土する点を指摘した（長瀬1983）。白井久美子は、陸橋付円墳を全国的視野から検討する中で多摩川流域の事例にも触れている（白井1983）。比田井克仁は、出土土器と陸橋の形態等から多摩川流域および神田川流域の陸橋付円墳の編年を行った（比田井1991）。福田健司は、多摩川流域の墳墓の大半が周溝を削平され周溝のみが検出されるにもかかわらず「円墳」という語を用いる点を批判し、弥生時代以来営まれてきた盛土をほとんど持たない墳墓を指す用語として「低墳墓」を提唱した（福田・清野・中山1999）。

これらの先行研究はいずれも墳墓の形態に焦点を当てており、出土した土器に関しては編年の指標として以外、あまり注目してこなかった。多摩川流域の墳墓の大半が墳丘を削平された状態で発見され、周溝から出土する土器がほぼ唯一の出土資料という状況を考えると、土器に関してより詳細な検討が必要である。また墳墓から出土する土器はそこで行われた葬送祭祀に用いられ

たとえてよいが、一般的に祭祀がそれを挙行する集団の結束の維持・強化に大きな役割を果たすと考える限りにおいて、墳墓出土土器の検討から群集墓造営集団の性格の一端に迫りうる可能性があるだろう。

関東地方における群集墓研究は、いわゆる「古式(初期)群集墳」⁽²⁾をめぐる議論と密接に関連している。古墳時代後期に出現する横穴式石室を主体部とする小型墳墓群に先立って、竪穴系の埋葬施設を有する円形墓が群集して造営される事例が知られるようになって久しいが、石部正志はこれらを「古式群集墳」と呼び、その被葬者は経営単位集団の家長であり、弥生時代の方形周溝墓と本質的には異ならないとした(石部1980・1992)。それに対し白石太一郎は、群集墳は首長墓としての大型古墳を構成する要素が規定的な要因となって出現するのであり、そうした要素の認められない弥生時代以来の円形周溝墓群は群集墳と区別して考えるべきであると主張した(白石1981)。すでに指摘されているように両者の議論は必ずしも噛み合っていないものの(杉山・太田2005)、群集墳出現の背景に家父長制的古代家族の成長を見る近藤義郎以来の群集墳論に対して(近藤1952)、白石が王権との関係という視点を導入した点は重要である。和田晴吾は群集墳を古式群集墳・新式群集墳・終末期群集墳に分類し、畿内政権との関わりを基準としてそれぞれに歴史的意義を与えた(和田1992)。和田の研究は群集墳研究の一つの到達点であるが、古墳時代前期から継続する方形墓を含む小型墳墓群と群集墳を区別する点は白石と同様である。現在の大勢としては白石・和田らに従って「古式群集墳」を定義する場合が多い。

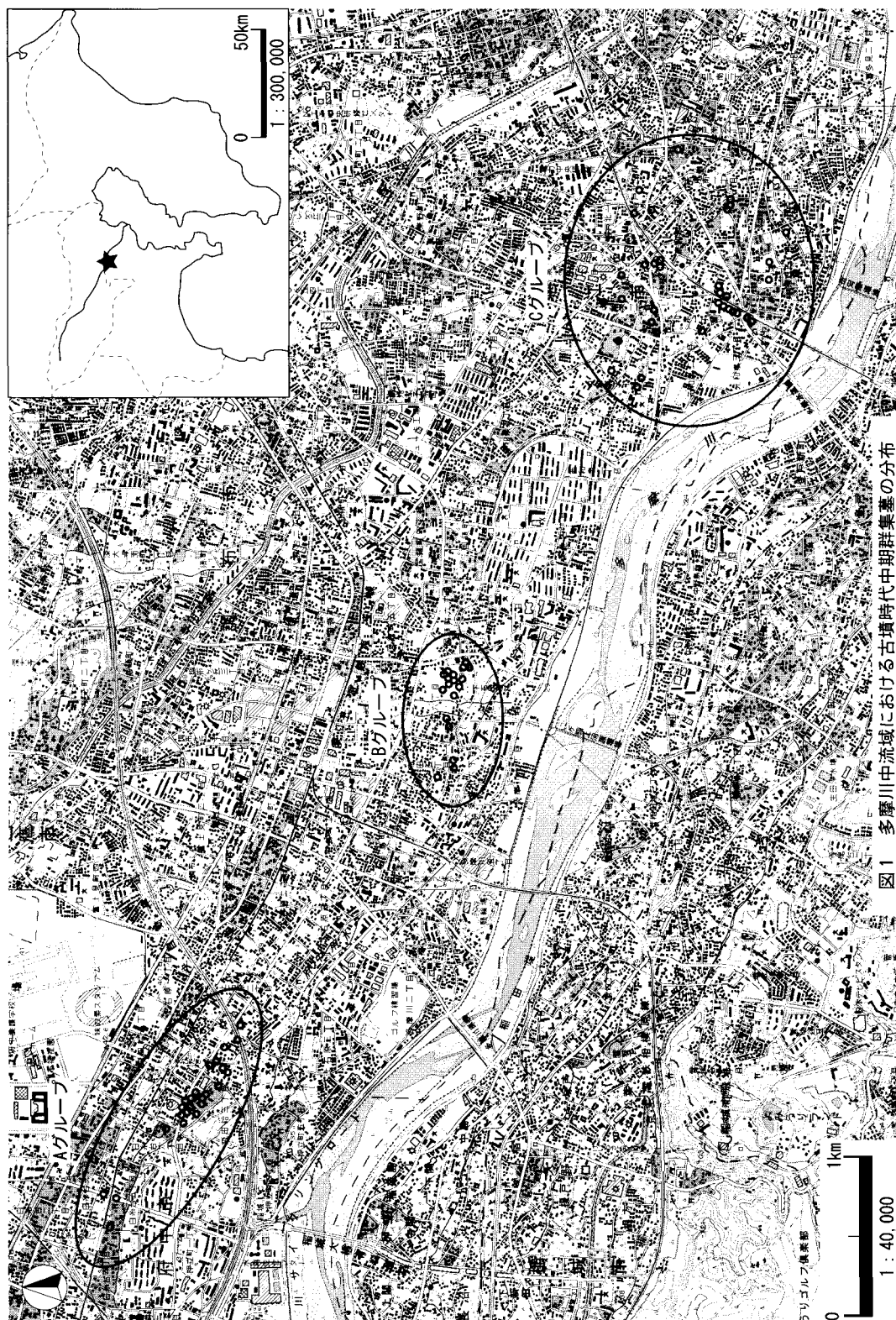
しかし、「畿内政権との関わり」というやや抽象的な概念を考古資料からいかにして汲み取るかという議論は必ずしも深まっておらず、このことは特に地方における群集墓研究に少なからぬ混乱を招いている。つまり、本来は歴史的な概念である「古式群集墳」という用語が、ともすれば小型墳墓の群集という程度の意味で使用される傾向があった。杉山晋作らは、概念を含まない名称として「群集墓」を用い、「古式群集墳」を論ずる前提作業として各地の群集墓の様相を整理する必要性を指摘した(杉山・太田2005)。筆者が本稿で群集墓といい、「古式群集墳」と鉤括弧付きで表記するのも杉山らの主張に同意するためである。本稿では墳墓出土土器の様相から多摩川中流域の群集墓造営集団の位置付けを明らかにしたのち、「古式群集墳」をめぐる議論との接点の模索へと進むことにしたい。

2. 分析

(1) 地域の設定

多摩川中流域における古墳時代中期の群集墓は立川段丘縁辺部に断続的に展開している(図1)。現在の市境や遺跡境界などによって別個の名称が与えられているが、群集墓としてのまとまりを考慮すると、上流側から以下の3グループに分けられる。

Aグループ：白糸台古墳群・飛田給古墳群によって構成される。



Bグループ：上布田古墳群・下布田古墳群によって構成される。

Cグループ：狛江古墳群によって構成される。

各グループ内において墳墓の分布は均質ではなく、特にCグループは和泉・猪方・岩戸の3支群に細分できる（甘粕1979、對比地1995）。また当地域の墳墓は開発に伴う大規模調査によってそれまで墳墓の存在が知られていなかった箇所からまともって検出されることもあり、現在把握できる様相が群集墓の実態を正確に反映しているとは限らない点にも留意しておかななくてはならない。とは言え大局的には多摩川中流域の群集墓の分布はこの3ヶ所に収斂されると考えて大過ない。Aグループより上流域で墳墓の造営が開始されるのは、現状では古墳時代後期以降とみられる。Cグループの下流には古墳時代前・中期の大型前方後円墳を含み、南武蔵の首長墓群と考えられる田園調布・野毛古墳群が存在する。

(2) 編年

土器による墳墓の編年は各報告書等で試みられているが、グループ間の並行関係を検討しているものは少ないため、ここで確認しておく。議論の対象は土師器の型式で言えば和泉式の時期が中心となるが、和泉式の細分や年代観については共通認識が形成されているとは言い難い。

比田井克仁は、和泉式という型式名を用いず、良好な住居一括資料を用いて、器形の変化、伴出須恵器、器種組成の変遷という観点から南関東の5世紀土器を4段階に編年した（比田井1988）。墳墓出土資料と住居出土資料とでは性格の違いを考慮しなくてはならないが、比田井の指摘の中で小型丸底土器がⅡ段階のうちに消滅する点、Ⅳ段階に須恵器模倣坏が出現する点は、これらの器種を多く出土する墳墓の分析においても有効である。また編年の定点となりうる初期須恵器^③の出土例としてTK73型式が下布田8号墳から、TK216～TK208型式が弁財天池1号墳から出土しており、前者をⅡ段階、後者をⅢ段階に位置付けることができる。弁財天池1号墳は小型丸底土器、須恵器模倣坏のいずれも出土しない点からもⅢ段階とすることができ、比田井の編年の妥当性を裏付ける。

その他の墳墓出土土器は器形等を比較し各段階に振り分けた。なお便宜上、4世紀代を0段階、6世紀代をⅤ段階とした。また、数は少ないものの多摩川流域以外の南武蔵の小型円形墓も比較対象として俎上に載せた。

0段階（5世紀以前、図2上段）

Aグループの飛田給6号墳、Bグループの古天神1号墳、Cグループの弁財天池1号方形周溝墓が挙げられる。弁財天池1号方形周溝墓が3世紀末から4世紀初頭、飛田給6号墳が4世紀前半、古天神1号墳が4世紀末の築造と考えられる。平面形態は弁財天池1号方形周溝墓と飛田給6号墳が方形、古天神1号墳が円形である。なお正式報告書は未刊であるが、Bグループに近接

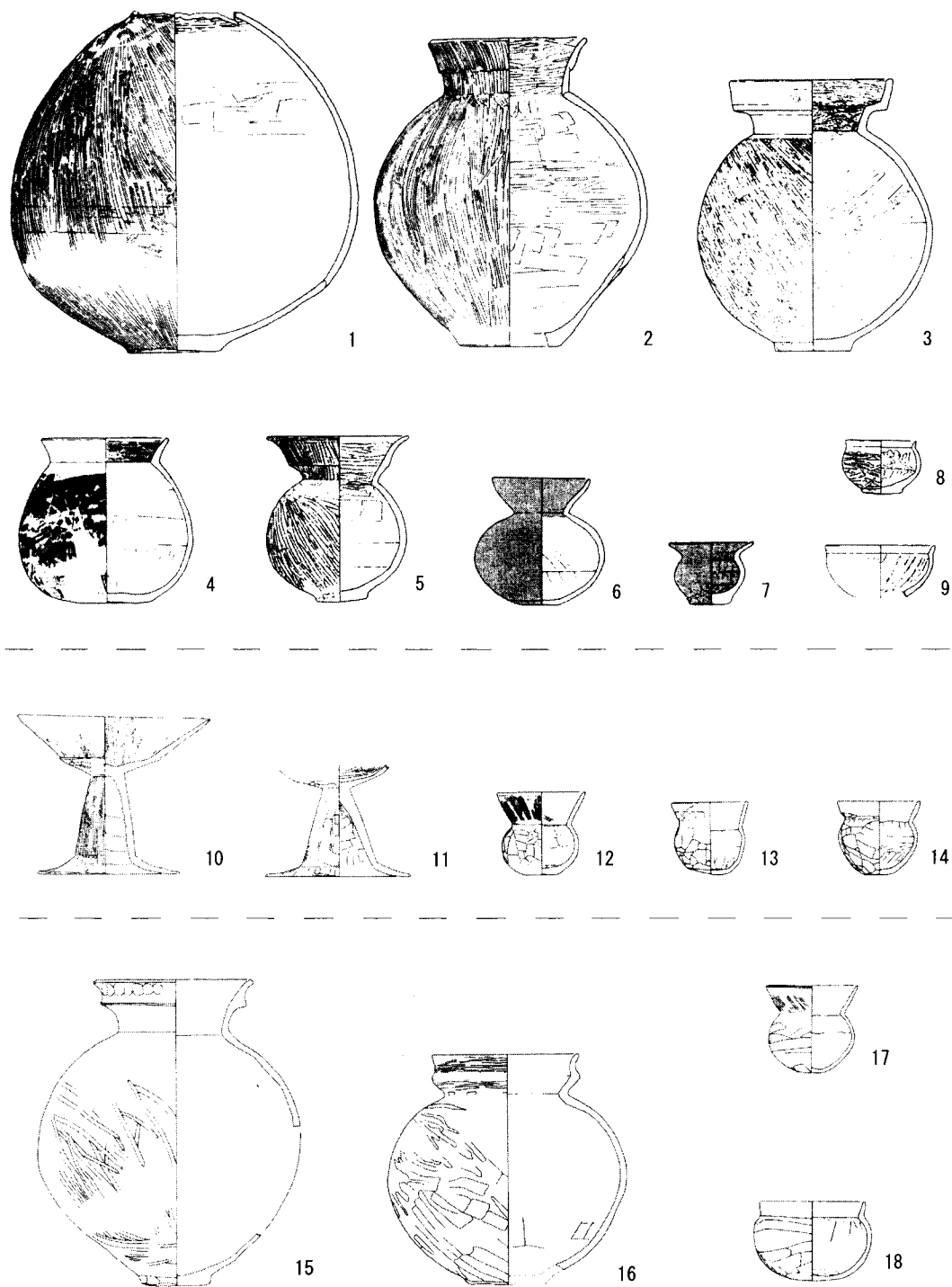


図2 群集墓出土土器 1

1, 2. 飛田給 6号墳 3～9. 古天神 1号墳 10, 11. 富士見町二丁目190号遺構
 12～14. 下布田14号墳 15, 17. 下布田 9号墳 16, 18. 飛田給 1号墳 図2から図4まで縮尺1/8

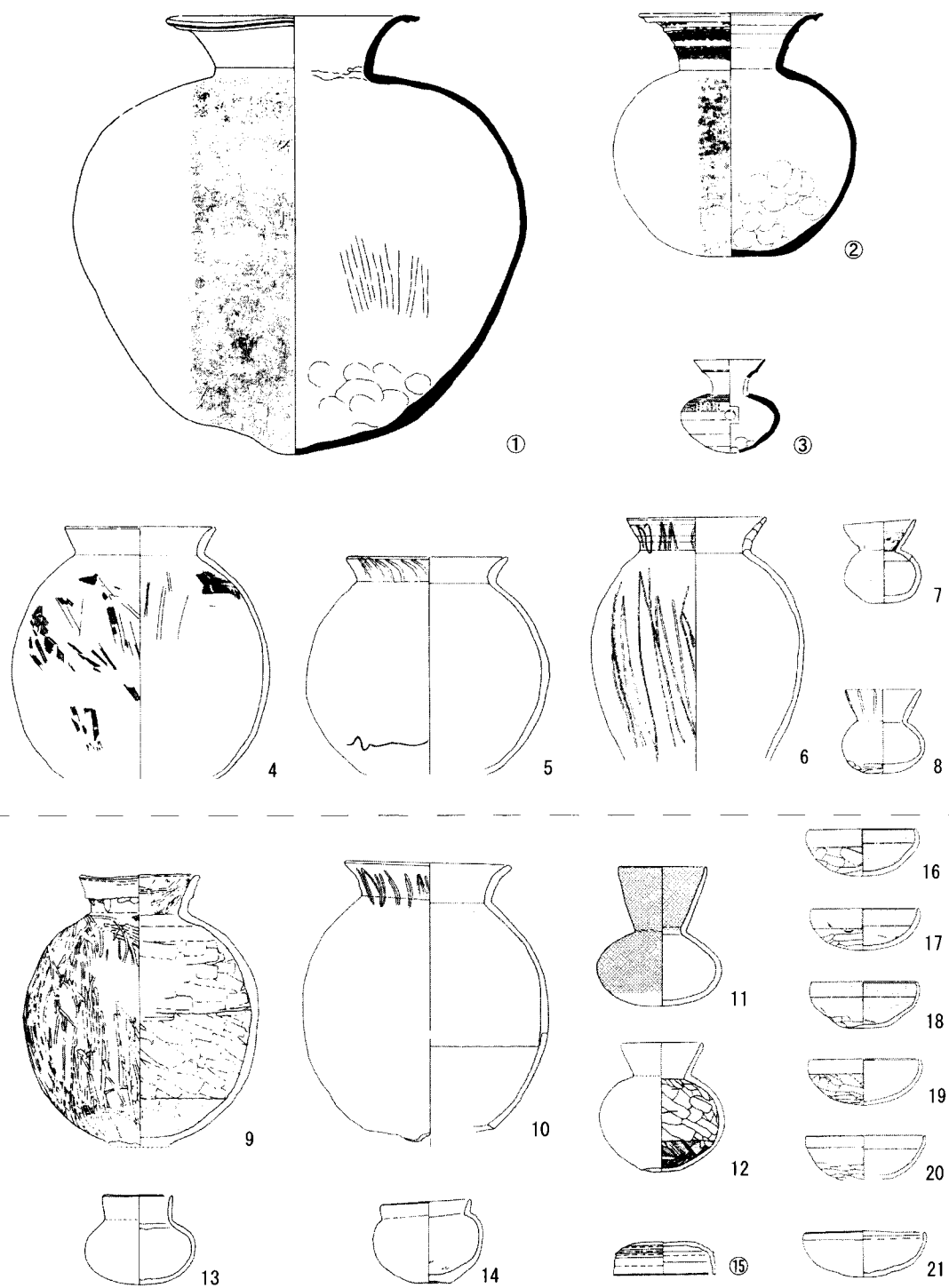


図3 群集墓出土土器 2

1～3. 下布田 8 号墳 4～8. 古屋敷塚古墳 9, 12～15, 21. 弁財天池 1 号墳
10, 11, 16～20. 東和泉 8 号墳 丸数字は須恵器

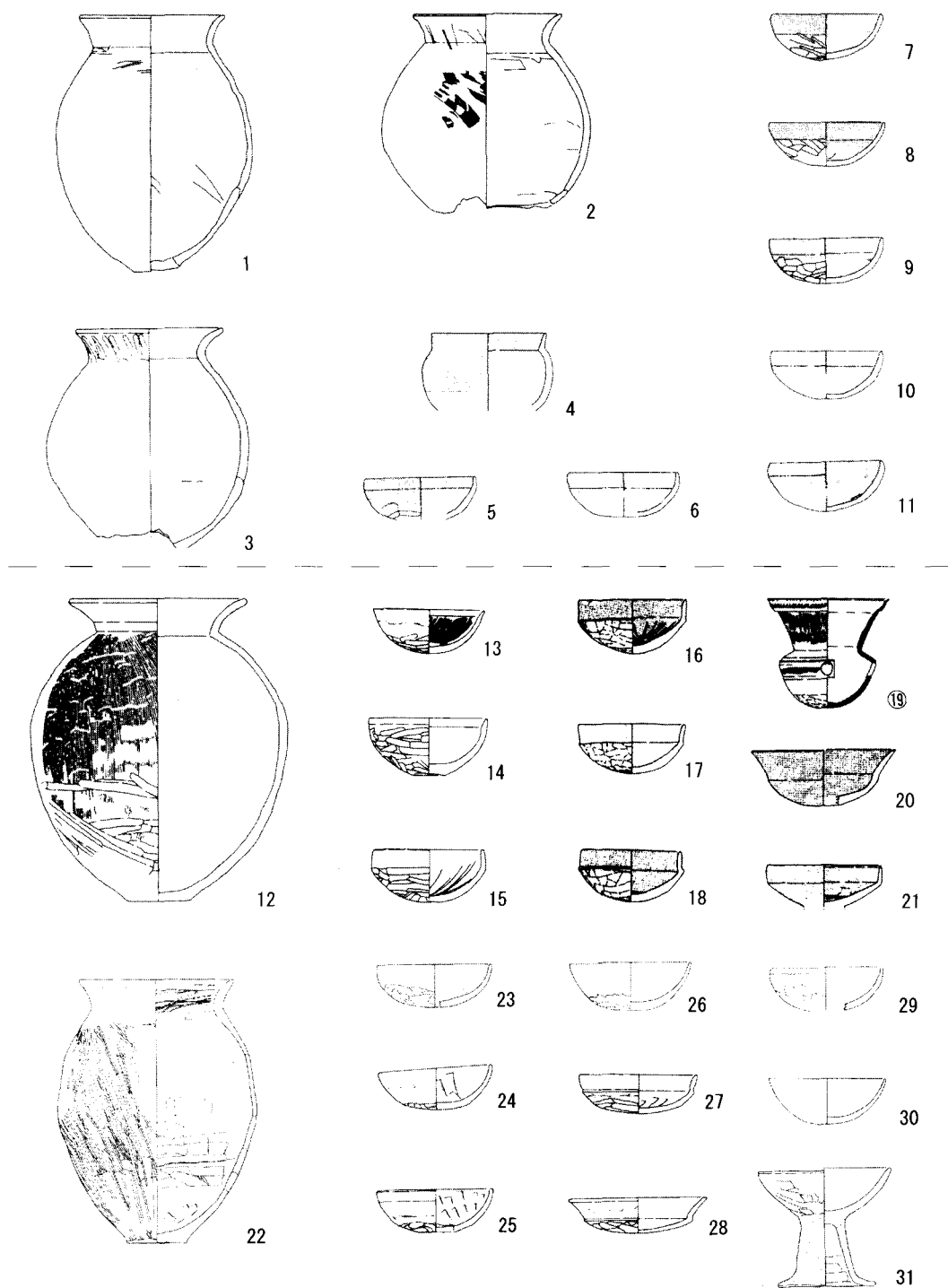


図4 群集墓出土土器3

1～3. 東和泉6号墳 4～11. 東和泉2号墳 12～15. 下戸塚2号墳 16～21. 菅原神社台地上古墳
 22, 23, 26, 29～31. 下布田8号墳 24, 25, 27, 28. 桜塚18号墳 丸数字は須恵器

する国領南遺跡や上ヶ給遺跡では、0段階からⅠ段階に該当する方形墓が確認されている（十時1990・1995）。

Ⅰ段階（5世紀第1四半期、図2中段）

Bグループの下布田14号墳は出土した小型丸底土器の口径が大きく古相を呈することから該期に位置付けられる。また、神田川下流域では富士見町二丁目190号遺構が該当する。

Ⅱ段階（5世紀第2四半期、図2下段～図3上段）

Aグループの飛田給1号墳、Bグループの下布田3・4・8・9・11・15号墳、Cグループの古屋敷塚古墳が該当する。下布田8号墳ではTK73型式の須恵器が出土している。

Ⅲ段階（5世紀第3四半期、図3下段）

Cグループの弁財天池1号墳、東和泉8号墳が該当する。弁財天池1号墳ではTK216～TK208型式の須恵器坏蓋が出土している。Cグループではこの時期、埴輪を樹立する駄倉塚古墳、土屋塚古墳が出現する。

Ⅳ段階（5世紀第4四半期、図4上段）

Aグループの白糸台1号墳、Bグループの下布田12号墳、Cグループの東和泉2・6号墳、神田川水系の下戸塚1号墳、向田2号墳が該当する。Cグループで埴輪を樹立する東塚古墳はⅢ段階後半からⅣ段階前半の築造と考えられる。

Ⅴ段階（6世紀、図4下段）

CグループではⅤ段階初頭に、帆立貝形古墳で埴輪を樹立する亀塚古墳が造営される。そして6世紀後半には多摩川流域においても横穴系の埋葬施設を採用する墳墓が出現するが、本稿においてはひとまず堅穴系埋葬施設の採用が想定される墳墓⁽⁴⁾のみを問題とすることとしたい。Aグループの飛田給2・3・4号墳、桜塚11・17・18号墳、白糸台3号墳、Bグループの下布田13号墳、Cグループの弁財天池2号墳、荒川下流域の菅原神社台地上古墳、神田川水系の下戸塚2号墳が該当する。なおⅡ段階に築造された下布田8号墳からはこの段階の土器もまとめて出土しており、墳墓での祭祀が継続していたことを示唆している。

以上のように出土土器によって各群集墓の年代と並行関係を確認してきた。各グループで墳墓造営のピークが異なり、それぞれに盛衰があるように見えるが、上述したように未知の墳墓が存在する可能性もあり判断は難しい。Cグループでは弁財天池1号方形周溝墓とそれ以後の墳墓の間には現状において100年以上の隔たりがあるが、切りあい関係を持たずに墓域を共有していることから、同一集団の墳墓と考えたい。またBグループ付近における正式報告書未刊の方形墓の存在を考慮すると、いずれのグループも5世紀以前の方形墓を含んでいる。方形墓から円形墓への転換は、Ⅰ段階のうちに起こっている。

A・Bグループにおいては、卓越した規模の墳墓が認められないので、比較的均質な集団構成

時期	グループ	墳墓名	器種組成						墳形	墳丘規模
			壺	甕	小型壺	埴・埴類	高埴	その他		
0	A	飛田給6号墳	○						方	c
	B	古天神1号墳	○		○				円	b
	C	弁財天池1号 方形周溝墓		○					方	c
I	B	下布田14号墳			○				円	c
	神田川	富士見町二丁目 190号遺構		○	○		○		円	b
II	A	飛田給1号墳	○		○				円	c
	B	下布田9号墳	○				○		円	b
		下布田8号墳		◎	◎			紡錘車	円	b
		下布田3号墳		○					円	b
		下布田4号墳			○				円	c
		下布田11号墳			○				円	c
		下布田15号墳			○				円	b
	C	古屋敷塚古墳		○	○				円	a
III	C	東和泉8号墳		○	○	○		紡錘車	円	c
		弁財天池1号墳	○		◎◎	◎◎		紡錘車	円	b
IV	B	下布田12号墳		◎					円	c
	C	東和泉6号墳		○					円	d
		東和泉2号墳				○			円	c
	神田川	向田2号墳				○			円	d
		下戸塚1号墳				○		紡錘車	円	d
V	A	飛田給2号墳				○			円	c
		飛田給3号墳				○			円	c
		飛田給4号墳				○	○		円	c
		白糸台3号墳				○	○	器台	円	c
		桜塚11号墳				○			円	c
		桜塚17号墳				○			円	c
		桜塚18号墳				○			円	c
	B	下布田13号墳				○			円	c
		下布田8号墳		○		○	○		円	b
	C	弁財天池2号墳	○			○			円	c
	神田川	下戸塚2号墳		○		○			円	c
	荒川	菅原神社台地上古墳			◎	○	○		円	c

表1 多摩川流域群集墓の編年と器種組成・配置一覧

○は土師器、◎は須恵器、ゴシック体は周溝底面に土器を配置する墳墓
 墳丘規模(周溝内径) a: 31~40m b: 21~30m c: 11~20m d: 10m未満

と考えられる。一方、CグループにおいてはⅡ段階の古屋敷塚古墳、Ⅲ段階の弁財天池1号墳と比較的大型の墳墓が累世的に造営されている。またCグループの初源となる弁財天池1号方形周溝墓は鉄釧を副葬するなど、Ⅲ段階以前から傑出した墳墓の存在が指摘できる。この点はⅢ段階以降のCグループにおいて埴輪を樹立する大型の墳墓が継続的に出現する前史として留意しておきたい。

(3) 土器組成の変遷

上述の編年に従って各墳墓の出土土器の組成をまとめたのが表1である。組成に関しては、あえて細分せず、壺・甕・小型壺（小型丸底土器および須恵器の甕を含む）・坏類（埴・鉢を含む）・高坏に分類した。なお後述するように、埴輪を樹立する墳墓は、他の墳墓とは性格を異にすると考えるので、ひとまず表からは除外してある。

さて表1によれば、Ⅱ段階まではほぼ壺・甕・小型壺に限定されていた器種が、Ⅲ段階からⅣ段階にかけて坏類が用いられるようになり、Ⅴ段階ではほぼ坏類に限定されるという、かなり明瞭な変遷が確認できる。神田川流域・荒川下流域の墳墓は多摩川流域に先駆けてⅣ段階のうちに坏類を主体とする土器組成を示す例が多い。また、Ⅳ段階以前には高坏の出土が非常に限定的である点も指摘できる。

Ⅳ段階以降に坏類が増加する点は住居跡と同様の傾向であり（比田井1988）、この現象を単独で見れば特に驚くには値しない。しかし、これに伴って壺・甕類の出土が激減する点は、群集墓における祭祀の内容に大きな変化があった事実を示唆している。特にⅡ段階とⅤ段階に祭祀が行われた下布田8号墳において、Ⅱ段階では坏・高坏を含まないにもかかわらず、Ⅴ段階では甕1個体、坏4個体、高坏1個体と坏類が主体を占めるようになる点は象徴的である。下布田9号墳の高坏はⅡ段階以前の多摩川中流域で唯一の出土例であるが、周溝内に小動物を埋葬したと考えられる甕の蓋として脚部を打ち欠いて転用したものであり（図5）、墳墓祭祀に用いられた祭器ではない。むしろ下布田9号墳の事例は、群集墓造営集団が日常用の土器としては高坏を保有してはいるが、祭祀用の土器としてはあえて用いなかったことを強く印象付ける。

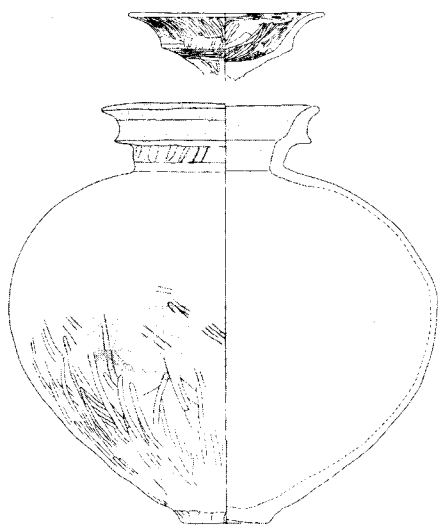


図5 下布田9号墳周溝内土坑出土土器
（縮尺：1/8）

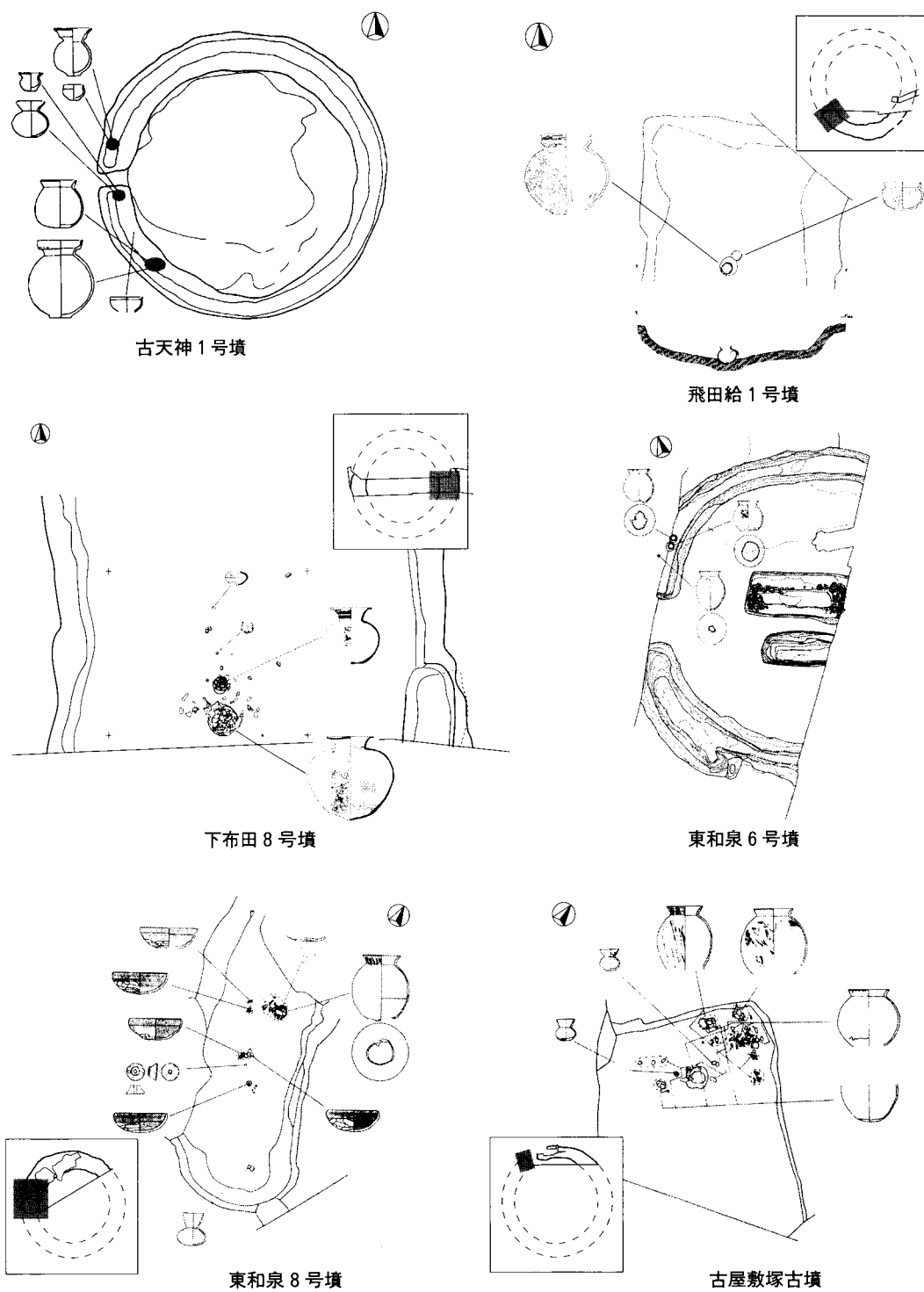


図6 周溝底面土器配置 (墳墓・土器とも縮尺任意)

(4) 土器の配置

先行研究において、周溝内出土土器が陸橋部周辺に集中する傾向が指摘されてきたことは既述した。しかし、より子細に検討してみると、周溝底面の一定箇所土器を集中的に配置する例が多いことに気付く（図6）⁽⁵⁾。IV段階以前の例を見てみると、飛田給1号墳、古屋敷塚古墳、東和泉8号墳では比較的大きな壺・甕類に小さな壺・埴類が伴うという、共通する器種構成が見出せる。下布田8号墳の須恵器は壺・甕・甗の3点であるが、甗は法量の点から上述の3墳墓における小型壺・埴類に対応する器種とみることができ、土師器と須恵器という材質の違いを超えて共通の器種構成を志向したと考えられる。

刊行の古い報告書や概報においては、土器の出土状況が明確に示されておらず土器配置が捉えられないものもある。しかし例えば古天神1号墳では、土器の詳細な出土状況は不明ながら、大型壺と小型壺のセットが周溝内の3ヶ所にまとまっている。もし墳裾から転落した土器であれば、偶然このようなセット関係を示すとは考えにくい。また、実見したところ土器はいずれもほぼ完形であった。こうした点から、古天神1号墳出土土器も周溝底面に配置されていたと考えるのが妥当である。古天神1号墳のような存在を考慮すると、周溝底面の土器配置は現在把握される以上に広く行われていた可能性が高い。

V段階には坏を周溝底面に配置する例が認められ、桜塚18号墳では坏が3枚重なった状態で出土している。

3. 考察

前節の分析において、器種組成の点でIV段階に大きな画期を見いだせること、配置の点で周溝底面配置が各時期を通して見られることを確認した。次に、群集墓における土器様相の持つ意味について、IV段階以前とV段階に分けて考えてみたい。

(1) IV段階以前の土器様相

(1)－1 土器祭祀からみた群集墓造営集団の性格

上述したように周溝底面に壺・甕類を配置するという構造が共通して確認できる点から、A～Cグループは共通の祭祀を行う、親和性の強い集団と考えられる。群集墓出土土器のセット関係から想定できるのは、壺・甕類に貯蔵された飲食物を小型容器に取り分けるといった飲食行為、あるいはその模擬的行為であり、いわゆる共飲・共食の祭祀であろう⁽⁶⁾。周溝内において壺・甕類を使用する祭祀の祖形は、弥生時代の方形周溝墓に求めるのが妥当であると考え（福田2006）。それはA～Cグループがいずれも5世紀以前の方形墓を含む事実からも首肯できる。

(1)－2 土器組成の比較

言うまでもなく、墳墓祭祀に用いられる土器組成は、集団が保持する土器組成のすべてではな

く、どの器種を祭祀に用い、どの器種は用いないかという選択の結果であり、そこには集落における土器組成以上に集団の「意志」が反映されているはずである。このことは、先の下布田9号墳の例で示したように、高坏を所有していながら祭祀用の器種としては用いていない点からも確認できる。すなわち、同時代の前方後円墳を中心とする「古墳」の土器組成と群集墓のそれとの比較によって、群集墓造営集団の性格や社会的位置を明らかにすることができると考える。

まず、古墳時代中期の多摩川流域においては典型的な大型前方後円墳が存在しないため、埴輪を樹立する墳墓との比較を試みる。なぜなら、IV段階以前の多摩川流域において埴輪を樹立する墳墓は非常に限定されており、埴輪を立て並べることで自体が、畿内政権を中心とする「古墳」の秩序に参画していることを表明する行為であったと考えるからである。古墳時代中期の多摩川流域における埴輪樹立墳墓で、土器様相がある程度判明するのは次の2例である。下流域の野毛大

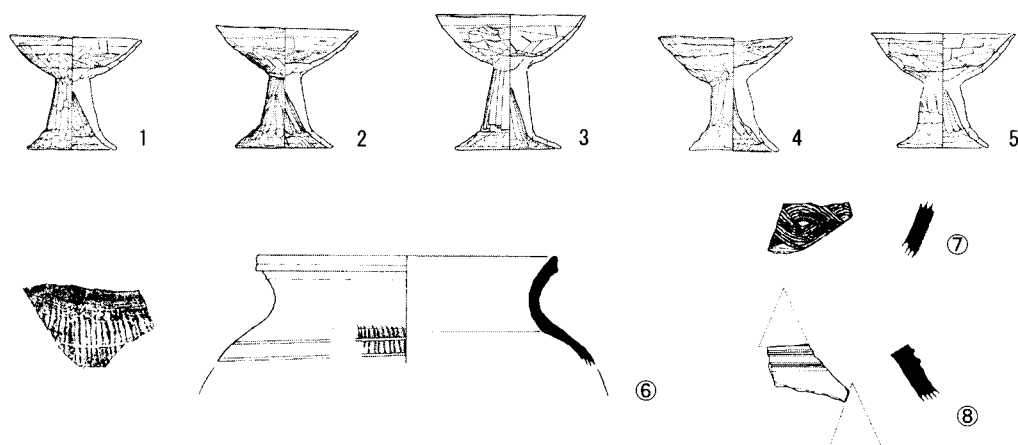


図7 野毛大塚古墳出土土器（縮尺：1/8、丸数字は須恵器）

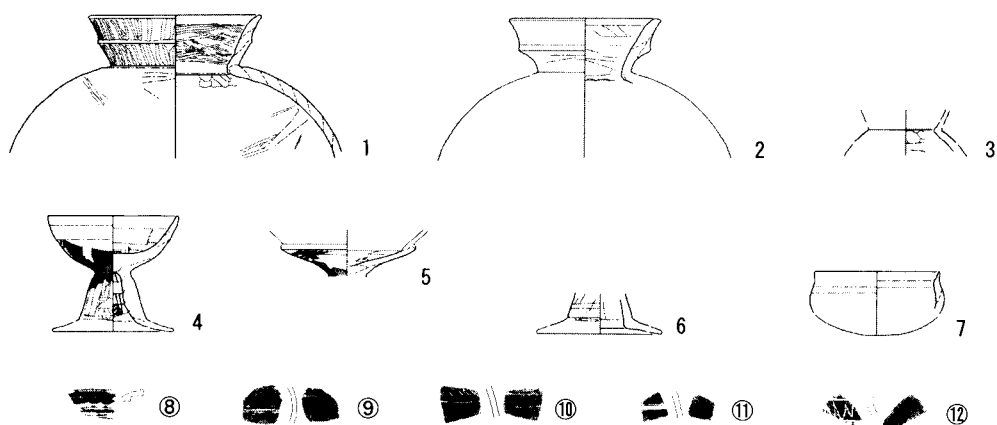


図8 土屋塚古墳出土土器（縮尺：1/8、丸数字は須恵器）

塚古墳は、墳長80mを超える帆立貝形古墳でⅠ段階の築造と考えられる。墳頂部より転落したと考えられる須恵器小型甕・器台の破片と、前方部と造り出しの間から土師器の高坏が5個体以上出土している（図7）。Cグループの土屋塚古墳は、墳長約35mを測る円墳でⅢ段階の築造である。須恵器片・土師器壺・坏等のほか、土師器高坏が3個体以上出土している（図8）。以上、いまだ類例は少ないが、いずれも祭祀用の土器としての土師器高坏が確認でき、群集墓との差異を示している。

次に古墳時代前期から中期初頭にかけての前方後円墳における土器様相を古屋紀之の研究（古屋2007）に拠つつ全国的に概観してみると、多量の高坏を墳頂に配置する行為自体は楯築墳丘墓ですでに出現しており、前期後半から中期初頭の西日本では古屋が「金蔵山型土器配置」と呼ぶ、柱状脚高坏と笊形土器のセット関係が成立する。東日本では出現期の古墳の墳頂部で畿内系加飾壺と東海西部系高坏が組み合わさる「弘法山型土器配置」が行われる⁽⁷⁾。「金蔵山型土器配置」と「弘法山型土器配置」の関係は明らかでないが、墳頂部に多量の高坏を配置するというあり方が地域差や土器の型式差を越えて普遍的に現れる点は古墳の出現を考える上で重要である。この現象は墳墓における祭祀が弥生時代の共飲・共食から古墳時代の供献へ変化するという指摘（岩崎1973）とも通じる。やや大雑把な捉え方であるが、こうした意味で高坏とは古墳における祭祀を象徴する器種と言えよう。

野毛大塚古墳は甲冑や石製模造品など夥しい量の副葬品からみて、畿内政権との強いつながりが窺われるから、高坏を多用する祭祀が行われたことは至当と言える。興味深いのはⅢ段階のCグループにおいて土屋塚古墳に見られる高坏を多用する祭祀と、東和泉8号墳や6号墳に見られる周溝内で壺・甕類を使用する祭祀が併存している点である。土屋塚古墳は、墳丘規模からみてⅢ段階におけるCグループの盟主の墳墓と認めてよい。つまりCグループでは、自らの集団を代表して近隣の勢力や畿内政権との関係を調整するリーダーの墳墓における祭祀、いわば対外的な祭祀としては普遍性の高い高坏を多用する祭祀を採用しながらも、集団の内的な葬送祭祀としては伝統的な壺・甕類を使用する祭祀を維持していたのである。土屋塚古墳や後続する東塚古墳において、近接する野毛古墳群系統の埴輪ではなく、上毛野に技術系譜が求められる埴輪を採用している点も（小野本2006）、Cグループが独自の交流網を持ち、野毛古墳群からの相対的な独立性を保っていたことを示している。

ところで、古墳時代中期の土師器は関東の和泉式に限らず全国的な斉一性を有する点が早くから指摘され、畿内政権による列島支配の伸長と関連付けて論じられてきた経緯がある⁽⁸⁾。筆者もこうした研究史を否定するつもりはないが、全国的な「かたち」の斉一化現象がある一方で、土器の「扱われ方」においてはいまだ在地的な様相を多分に残している点も併せて評価すべきであると考え。このことは、以下に見る初期須恵器の「扱われ方」にも明瞭に現われている。

(1) - 3 下布田8号墳出土初期須恵器の意義

下布田8号墳出土の須恵器大甕は陶邑窯跡群のTK73号窯でしか確認されていない特殊な叩き板を用いて成形されており、確実な陶邑窯跡群からの搬入品である⁽⁹⁾。これは現状において関東全域でもで最古級に属する須恵器であり、それが下布田8号墳のような小墳墓から出土する背景について今少し掘り下げた検討が必要である。

上述したように多摩川流域では野毛大塚古墳にも初期須恵器が搬入されている。器台坏部片にはごく初期の須恵器にしか認められない螺旋状沈線文が施されている(図7-7)。風間栄一はこの破片にTK73型式の特徴を認めながらも、埋葬施設(第2主体部)との並行関係からTK216型式と捉えている(風間1999)。しかし、この螺旋状沈線文は、TK73号窯より遡るTG232型式や一須賀2号窯と比較しても遜色ない精緻な装飾であり、TK216型式まで降るとは考えにくい。あえて埋葬施設との並行関係を想定しなくとも、当該期の東国における須恵器の希少性を考えれば、入手から一定期間の保有あるいは伝世を考慮しても不自然ではなく、野毛大塚古墳の須恵器も下布田8号墳とほぼ同時期と考える。

下布田8号墳はCグループの土屋塚古墳などと異なり、グループ内で傑出した規模を持つわけではない。またBグループでは、下布田8号墳の須恵器を除いて畿内政権とのかかわりを示唆する考古事象は皆無である。もちろん、全国的にみて初期須恵器を出土する古墳が必ずしも大型の前方後円墳に限られるわけではないが、少なくともBグループが初期須恵器を直接入手しうるほどの畿内政権との強固な結びつきを有していたとは状況的に考えにくい。むしろ野毛大塚古墳と下布田8号墳の須恵器がほぼ同時期である点を考えると、野毛大塚古墳被葬者が畿内政権との密接なかかわりによって一括して入手した須恵器が、野毛大塚古墳被葬者を介して二次的に下布田8号墳にもたらされたと考えほうが自然であろう。

下布田8号墳被葬者が野毛大塚古墳を介して当時の東国において非常に希少であった初期須恵器を入手し得たという事実から、野毛古墳群を営んだ首長層がBグループ造営集団との関係を重要視していたと推定できる。ところが、すでに見てきたように下布田8号墳における須恵器の配置と器種構成は在地の伝統的な土器祭式の系譜上にあり、単に土師器を須恵器に置換したに過ぎない。野毛大塚古墳からの初期須恵器の授与という行為は、受け手である下布田8号墳には何らの祭式の変化をもたらしておらず、単なるモノの移動というレベルにとどまっていることを強調しておきたい。

(2) V段階の土器様相と古式群集墳論

V段階初頭にはCグループに亀塚古墳が出現する。帆立貝形前方後円墳という墳形や、鉄地金銅張りのf字形鏡板付轡や杏葉を含む馬具、高句麗古墳壁画と文様が類似する金銅製毛彫り金具などの副葬品からは、亀塚古墳被葬者と畿内政権との密接な結びつきが想定できる。先にⅡ・Ⅲ

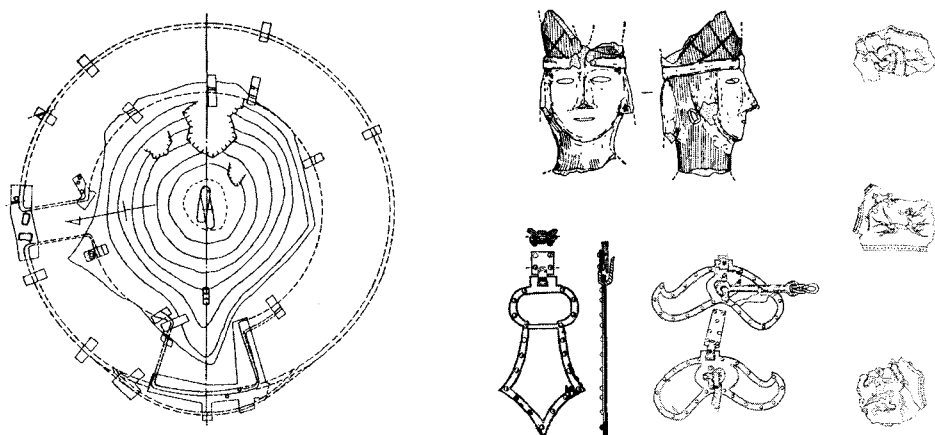


図9 亀塚古墳と出土遺物（墳丘：縮尺1/1000、遺物：縮尺1/8）

段階のCグループについて、畿内政権との関係を持ちながらもいまだ相対的な独自性を残している段階と評価したが、亀塚古墳の段階では畿内政権との関係は一段と深まったと考えられる。またIV段階以降、群集墓の土器組成の主体が壺・甕類から坏類へと変化し、坏を単独あるいは複数枚重ねた状態で周溝底面に配置する例が出現する。この二つの現象は互いに関連するものと考えられ、群集墓造営集団内部に大きな変容があったことを窺わせる。

IV段階からV段階におけるこうした変化は、いわゆる「古式群集墳」をめぐる論議と関連するものと思われる。そこで、関東の群集墳研究に大きな影響を与えた和田晴吾の研究（和田1992）と関東の事例研究について再度瞥見した後、南武蔵との比較を試みたい。

和田は、古墳時代中期の小型墳墓群のうち、円形墓群を「古式群集墳」と定義し、弥生時代以来の方形墓群と区別した。それは、円形墓からなる群集墓こそが、横穴式石室をもつ新式・終末期群集墳に系譜的に連続するものであり、畿内政権による直接的民衆支配の第一段階とみなしうると考えたためである。また、「後期前葉における広範囲での小型低方墳の円墳化、すなわち、古式群集墳の成立」と述べていることから（和田1992:333-334頁）、同一墓群で方形墓から円形墓に転換する場合、後者を古式群集墳と認める立場と理解できる。

関東以北の群集墓を造営のあり方によって類型化した山田俊輔は、古墳時代中期後半に造営を開始する群集墓と、前代からの伝統的墓域を継承する群集墓の存在を提示した（山田2001）。そして前者に関しては畿内と同一規格の2条3段の円筒埴輪の採用や（山田2001）周溝に坏類を重ねて配置するという斉一的な土器祭祀の採用から（山田2005）、造営の背景に畿内政権の政治的意図や、畿内からの人の移動までを想定している。

和田や山田以前に墳墓出土土器を検討していた駒見佳代子は、土師器の五領式期末から和泉式期初頭に関東では方形墓が消滅するが、この時期の方形墓出土土器が、従来の壺・甕類を中心と

する構成から高坏を多く含むようになるという注目すべき指摘を行っている（駒見1985）。そして方形墓から円形墓への転換と軌を一にする土器組成の変化に「伝統祭祀の崩壊」すなわち畿内政権を頂点とする墳墓祭祀の在地社会への浸透を見る視点は、和田の古式群集墳論と共鳴する。

以上のように見てくると、和田が大局を示した古式群集墳論は、関東において土器や埴輪といった遺物レベルでの議論が進められている段階と言えよう。少なくとも駒見・山田らが主な検討対象とした武蔵や上毛野においては、①方形墓から円形墓への転換（あるいは方形墓を含まない）、②高坏を含む坏類を主体的に用いる祭祀（特に周溝底面に坏を重ねて配置する）の採用という2点を指標として、歴史的概念としての「古式群集墳」を群集墓から抽出することができそうである。

こうした視点から南武蔵の群集墓を再検討してみると、方形墓はいまだ確認例は少数ながら各グループ内に確実に存在し、①の画期はⅠ段階である。ところが、再三述べているように②の画期はⅣ段階の中で起こっている。すなわち南武蔵における群集墓の「古式群集墳化」⁽¹⁰⁾は、他地域の多くがそうであるように中期後半ないし後期初頭に突如として起こったわけではなく、ある程度の期間をかけて徐々に達成されたとみるべきであろう。墳形は円形化しながらも在地的な土器祭祀を保持しているⅡ段階からⅢ段階は、いわば「半独立的」な状態であったと言え、先に見た下布田8号墳における初期須恵器の扱われ方や、Ⅲ段階のCグループにおける土器祭祀の二元性は、それを示唆する。

南武蔵において土器組成の変化が完了するのは、亀塚古墳が築造されるⅤ段階初頭である。墳墓群の造営初期段階に墳長30～40m級の帆立貝形古墳を含むことは「古式群集墳」の造営パターンの一つであり（山田2001）、また亀塚古墳の埴輪は北武蔵の古式群集墳と類似度が高い（城倉2008）。こうした点からも、亀塚古墳の出現は一つのメルクマールとなる。亀塚古墳の出現をもって南武蔵の「古式群集墳化」が達成されたとすると、5世紀後半とされる上毛野や北武蔵の事例よりもかなり遅れる。このことは後期の大型前方後円墳が造営されないことと関連して南武蔵の停滞性を示す証左と考えられがちであるが、ここまで検討してきた当地域の5世紀代の独自性を考慮すると、一概にそうとも言い切れないように思われる。

野毛古墳群ではⅣ段階以降、大型古墳の造営が停止し、さらに下流の田園調布古墳群に造墓地が移動する。首長墓系列の造営地が下流域へと後退する現象と多摩川中流域の「古式群集墳化」はほぼ同時に起こっており、群集墓造営集団が地域支配の一角を担う主体へと成長したことを示していると考ええる。Cグループでは亀塚古墳に後続する6世紀中葉の兜塚古墳以降、大規模な古墳や横穴式石室を主体部とする墳墓の存在は知られておらず、6世紀後半には衰退する。とは言え、地域首長墓に対する従属性が強調される場合の多い「古式群集墳」に対して、短期間ではあるが地域社会における主体性を獲得した多摩川中流域の事例は、従来の古式群集墳像とはやや異なる類型と言える。

4. まとめ

本稿では、多摩川中流域に展開する古墳時代中期の群集墓について、土器の組成と配置の変遷、および初期須恵器の導入といった観点から検討してきた。最後に本稿で論じてきたところをまとめて結びとする。

- ・多摩川中流域の古墳時代中期群集墓は、いずれも古墳時代前期の方形墓からの墓域を継承した群集墓であり、周溝底面で壺・甕類を用いる伝統的な祭祀を行う集団墓である。
- ・Ⅳ段階以前の周溝底面における祭祀には一貫して高坏を用いない。これは群集墓造営集団が同時期の前方後円墳の祭祀とは異なる祭式を保持していたことを示している。
- ・下布田8号墳の初期須恵器は畿内政権から野毛大塚古墳を介してもたらされた可能性が高いが、祭式は在地型を踏襲しており、初期須恵器は単にモノとしての受容にとどまっている。これは群集墓造営集団が畿内政権や野毛首長層から相対的に自立した立場にあったことを示している。
- ・Ⅴ段階における亀塚古墳の出現を契機として、多摩川中流域の群集墓の「古式群集墳化」が完了する。

5世紀後半に全国各地の首長墓系列が断絶する現象は小野山節の指摘以降発展的に継承されてきた（小野山1970、都出1988、和田1992など）。関東における「古式群集墳」の展開も、そうした5世紀後半の画期と結び付けて議論が展開されてきた。本稿で検討してきた多摩川流域の動向も、巨視的には汎列島の地域変動の一コマに過ぎないものではある。しかし、古墳時代前期以来の伝統的墓域を継承してきた集団が中期を通して地域を代表する勢力に成長してくる点は、従来語られてきた5世紀後半における「首長墓系列の断絶→新興勢力の台頭」という図式とは若干様相を異にする。首長墓系列の変動と「古式群集墳」の出現は確かに汎列島の注目すべき現象であるが、その実態は地域によって多様であったことを多摩川流域の様相は示唆しているように思う。

本稿の執筆に際し、岡内三眞教授をはじめ、以下に記す諸氏・諸機関からご指導・ご厚誼を賜った。末筆ながら記して感謝の意を表します（敬称略・五十音順）。

有村由美 生田周治 宇佐美哲也 草野潤平 黒済玉恵 寺田良喜 伝田郁夫 十時俊作
 古屋紀之 山田俊輔 山本ジェームズ 狛江市教育委員会 世田谷区教育委員会
 調布市遺跡調査会 調布市教育委員会

注

- (1) 前稿において埴輪からみた古墳時代中期の多摩川流域の様相を整理したが(小野本2007)、群集墓に対する視点を欠いていたため、不十分な点や訂正すべき点が認められた。本稿はそうした不備を訂正することの一つの目的としているため、前稿と矛盾する点に関しては本稿の論旨を筆者の見解とすることをご了解願いたい。
- (2) 「初期群集墳」と「古式群集墳」では論者によってニュアンスが異なる場合もあるが、多くの場合は同義に用いられているようである。本稿の分析レベルにおいてはどちらの語を用いても論旨に影響はないため、紙幅の都合上「古式群集墳」に統一した。
- (3) 初期須恵器は田辺昭三の定義による(田辺1982)。また本稿における須恵器編年はすべて『須恵器大成』(田辺1981)の陶邑編年を使用し、実年代の比定は酒井清治(2006)等を参考にした。
- (4) 多摩川流域の小墳墓は盛土の大半を削平されて検出されるため、堅穴系の埋葬施設が残存することは極めて稀である。しかし横穴系埋葬施設の場合、地山に墓坑を穿って構築されるために床面付近が残存する事例が多い。従って多少の不安要素はあるものの墳墓の中心から主体部が検出されない場合を堅穴系埋葬施設の採用が想定される墳墓として取り扱った。
- (5) 図6は市史や報告書をもとに作成したが、明らかに時期の異なる遺物は除外するなどの改変を行っている。
- (6) 周溝底面に配置された壺・甕類には底部穿孔を施すものがある。穿孔はいずれも焼成後に行われていることから、祭祀の終了段階に行ったものと考えたい。すなわち、底部穿孔の有無は祭祀の最終局面で穿孔という行為を行うか、あるいはそれを省略するかの違いであり、祭祀そのものには違いはないものとする。
- (7) I段階の南武蔵において唯一多量の高坏を出土する富士見町二丁目190号遺構は東京湾を臨む位置に所在しており、対岸の東京湾東岸は「弘法山型土器配置」の典型例である千葉県高部古墳群や神門古墳群が出現する地域である。このことから、富士見町二丁目190号遺構の器種構成は東京湾東岸地域の影響を強く受けたものと考えられる。
- (8) 最近では坂野和信による研究史の整理がある(坂野2007)。
- (9) 木下はか2003において酒井清治氏のコメントとして発表されている。
- (10) 上述①・②の画期を経て群集墓が「古式群集墳」へと変容する現象を、本稿では群集墓の「古式群集墳化」と呼ぶことにしたい。

引用文献

- 甘粕 健 1970「武蔵国造の反乱」『古代の日本7 関東』角川書店 134-153頁
- 甘粕 健 1979「狛江古墳群の構造と特質」『狛江市の古墳(1)』狛江市教育委員会 67-77頁
- 石部正志 1980「群集墳の発生と古墳文化の変質」『東アジア世界における日本古代史講座』4 学生社 370-402頁
- 石部正志 1992「群集墳論」『古墳時代の研究』12 雄山閣出版 55-69頁
- 岩崎卓也 1973「古式土師器再考—前期古墳出土の土師器をめぐって—」『東京教育大学文学部紀要』91 1-26頁
- 小野本 敦 2006「円筒埴輪」『土屋塚古墳発掘調査報告書』狛江市教育委員会 21-24頁
- 小野本 敦 2007「毛野と武蔵の円筒埴輪」『埴輪研究会誌』11 1-22頁
- 小野山節 1970「五世紀における古墳の規制」『考古学研究』16-3 73-83頁
- 風間栄一 1999「須恵器」『野毛大塚古墳』世田谷区教育委員会 419-422頁
- 近藤義郎 1952「問題の所在」『佐良山古墳群の研究』41-53頁
- 駒見佳香子 1985「葬送祭祀の一検討—関東地方を中心として—」『土曜考古』10 27-40頁
- 酒井清治 2006「須恵器の編年と年代観」『日韓古墳時代の年代観』国立歴史民俗博物館・韓国国立釜山大学校博物館
- 城倉正祥 2008「北武蔵における埴輪生産の定着と展開」『古代文化』60-1 97-107頁

- 白井久美子 1983「小規模古墳の一類型についてーブリッジ付円墳の検討ー」『古代』75・76 29-69頁
- 白石太一郎 1981「群集墳の諸問題」『歴史公論』7-2 雄山閣出版 79-86頁
- 杉山晋作・太田博之 2005「関東における古墳時代中期群集墓の墓制変容」『考古学ジャーナル』528 ニューサイエンス社 3-4頁
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 田辺昭三 1982「初期須恵器について」『考古学論考』小林行雄博士古希記念論文集刊行委員会 417-429頁
- 對比地秀行 1995「第5節 狛江市内の古墳」『多摩地区所在古墳確認調査報告書』多摩地区所在古墳確認調査団 172-177頁
- 都出比呂志 1988「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』22 1-16頁
- 十時俊作 1990「第四章 第三節 古墳時代の遺跡」『調布市史 上巻』調布市史編集委員会 199-214頁
- 十時俊作 1995「第2節 調布市内の古墳」『多摩地区所在古墳確認調査報告書』多摩地区所在古墳確認調査団 155-160頁
- 長瀬衛 1983「円形周溝址について」『調布市飛田給遺跡』調布市教育委員会 374-379頁
- 坂野和信 2007『古墳時代の土器と社会構造』雄山閣
- 比田井克仁 1988「南関東五世紀土器考」『史館』20 52-75頁
- 比田井克仁 1991「3 遠藤山古墳群について」『遠藤山遺跡』中野区教育委員会 78-83頁
- 福田健司・清野利明・中山弘樹 1999「東京都における5世紀の土器と問題点」『東国土器研究』5 153-170頁
- 福田 聖 2006「方形周溝墓における共通性」『考古学ジャーナル』534、ニューサイエンス社 22-25頁
- 古屋紀之 2007『古墳の成立と葬送祭祀』雄山閣
- 山田俊輔 2001「東北・関東における古式群集墳の展開」『潮航』19 1-16頁
- 山田俊輔 2005「古墳時代中期群集墓分析の新視角」『考古学ジャーナル』528 ニューサイエンス社 19-21頁
- 和田晴吾 1992「群集墳と終末期古墳」『新版古代の日本』5 角川書店 325-350頁
- 和島誠一・甘粕健 1958「武蔵の争乱と屯倉の設置」『横浜市史』第1巻 112-130頁

墳墓発掘調査報告書等

- 兜塚古墳：兜塚古墳発掘調査団 1997『兜塚古墳発掘調査報告書』
- 亀塚古墳：小出義治 1985「亀塚古墳」『狛江市史』狛江市史編さん委員会 119-188頁
- 桜塚11・17・18号墳：平 自由ほか 2005『飛田給遺跡』南山武考古学研究所
- 下戸塚1・2号墳：徳澤啓一・高橋清文 2000『下戸塚遺跡Ⅳ』新宿区生涯学習財団
- 下布田3・4号墳：平 自由ほか 2006『下布田遺跡』調布市遺跡調査会
- 下布田8・9・11・12・13・15号墳：木下正史ほか 2003『下布田遺跡』調布市遺跡調査会
- 下布田14号墳：長瀬 衛ほか 1979『調布市下布田遺跡』調布市教育委員会
- 白糸台1・3号墳：山口辰一ほか 1979『武蔵国府関連遺跡調査報告Ⅰ』府中市教育委員会
- 菅原神社台地上古墳：鶴間正昭ほか 1997『神原神社台地上遺跡』東京都埋蔵文化財センター
- 土屋塚古墳：宇佐美哲ほか 2006『土屋塚古墳発掘調査報告書』狛江市教育委員会
- 飛田給1・2・3・4号墳：長瀬 衛ほか 1983『調布市飛田給遺跡』調布市遺跡調査会
- 飛田給6号墳：平 自由ほか 2003『埋蔵文化財年報一平成15年度一』調布市教育委員会
- 野毛大塚古墳：寺田良喜ほか 1999『野毛大塚古墳』世田谷区教育委員会
- 富士見町二丁目190号遺構：後藤宏樹ほか 2006『富士見二丁目遺跡』武蔵文化財研究所
- 古天神1号墳：滝沢 亮 1983「調布市上布田遺跡の調査ー布田六丁目10番地における古墳の調査ー」『考古学ジャーナル』219、ニューサイエンス社、2-6頁
- 古屋敷塚古墳、東和泉2・6・8号墳：寺畑滋夫ほか 1995『小田急小田原線（成城学園前駅～登戸駅間）潜像連続立体交差事業に伴う遺跡調査報告書』小田急遺跡調査会

弁財天池 1 号方形周溝墓、弁財天池 1・2 号墳：對比地秀行 1992『弁財天池遺跡』狛江市教育委員会
向田 2 号墳：比田井克仁ほか編 2006『中野区向田遺跡Ⅱ発掘調査報告書』共和開発株式会社

図版出典

図 1 国土地理院発行 2 万 5 千分の 1 地形図〈溝口〉をもとに筆者作成 図 2-1, 2：平ほか 2003 3～9：滝沢 1983 10, 11：後藤ほか 2006 12～14：長瀬ほか 1979 15, 17：木下ほか 2003 16, 18：長瀬ほか 1983 図 3-1～3：木下ほか 2003 4～8、10, 11, 16～20：寺畑ほか 1995 9, 12～15, 21：對比地 1992 図 4-1～11：寺畑ほか 1995 12～15：徳澤・高橋 2000 16～21：鶴間ほか 1997 22, 23, 26, 29～31：木下ほか 2003 24, 25, 27, 28：平ほか 2005 図 5 木下ほか 2003 図 6 十時 1990、滝澤 1983、長瀬ほか 1983、木下ほか 2003、寺畑ほか 1995 をもとに筆者作成 図 7 寺田ほか 1999 図 8 宇佐美ほか 2006 図 9 小出 1985